

小児看護

THE JAPANESE JOURNAL OF CHILD NURSING, MONTHLY

9

Vol.46 No.9 SEPTEMBER

2023

日本に住む外国人の 子どもへのケア



連載

もっと知ろう！障害がある
子どもと家族のくらしの支え方
学生ボランティアの活動

へるす出版

佐藤聡美 Sato Satomi

聖路加国際大学公衆衛生大学院准教授

第27回 誰がための道

皆さんは、どこを散歩するのが好きだろうか。秋は散策にもってこいの季節だ。私は間違いなく古書店街だ。しかも、できるだけ違う道を歩いてみたい。あちこち歩いた後のリュックは、どうしても本で重たくなってしまう。エコバッグを持参していたときもあったが、持ち手が食い込んで痛い。垂涎の1冊を安全に持ち帰るには、結局、リュック姿にたどり着いた。昔あったCMのように「みてるだけー」のつもりで出かけるのだが。

久しぶりにショッピングモールの中の本屋に入る。本屋に住みたいと思うくらい、本に囲まれることが好きだ。そして、数々の新刊をなでて驚く。手触りが、匂いが違うのだ。つるつるとした表紙が、雨や汚れに格段に強くなっている。発色がきれい。そして、中身の紙の質が上等なのだ。本の帯さえ、表紙に直接印刷している本も出始めた。古本から現代本を手取るだけで、タイムスリップを満喫できる。

タイムスリップといえば、現代さえ、未来からみれば古臭い部分があるだろう。でも、その変化をかぎ取る嗅覚がある人は、どんどん先頭を切って歩いてほしい。

件のショッピングモールで、「ベビーカーをご利用のお客様や、小さいお子様連れのお客様は、周りのお客様のご迷惑となりませんよう…」というアナウンスを聞いて、非常な違和感を覚えた。「周りのお客様」に「ベビーカーやお子様連れの方に道をお譲りください」とアナウンスすべきではないのか。

過日、小児がん経験者の中学生が、修学旅行を楽しみにしていた。親子は、旅行中の服薬管理のためにスマートフォンでタイマーをセットしたいと合理的配慮を申し出た。ところが、担任の先生はスマートフォンの利用は学校では禁止されているので、それはできないと断った。私は驚倒した。担任が、大多数であるクラスメイトに説明をして、皆で合理的配慮を形成すべきなのだ。配慮とはプロセスであり、担任ひとりで決めるものではない。

しかしながら、担任と親が合意形成したのは、アップルウォッチを利用することだった。私はさらに仰天した。そのお金はどこから出てくるのだ？ その購入にかかる時間は？ もしもこの状況で学校が「合理的配慮を提供した」と涼しい顔をしていたとしたら、奇異ではないだろうか。配慮のコストは、常にマイノリティが払っている。それなのに、マジョリティはその構図に無自覚で、コストを払わせている意識もないのだ。

その場で権威のある人が説得すべき対象は、マイノリティではなく、マジョリティなのだ。そうやって、マジョリティがマイノリティを配慮するプロセスを学んでいく。教育の中心である共存は、子どもたちがそうやって体験しないとわからない。ショッピングモールのアナウンスが、学校でも職場でも響き渡っている。果たして、私たちはこの構造から抜け出せるのだろうか。

佐藤聡美

さとう・さとみ

聖路加国際大学公衆衛生大学院准教授。博士。臨床心理士、公認心理師。NPO 法人エゴノキクラブ理事長。富山県出身。米国の Bellevue Community College を卒業後、お茶の水女子大学大学院修了。国立成育医療研究センターにおいて小児がんの臨床と研究に携わる。お茶の水女子大学特任講師を経て、現職。著書『看護師と家族でかなえる最高のサポート：子どもの入院から就学・就労まで』。工作好きな一児の母。令和4年度大谷賞(日本小児血液・がん学会賞)受賞。